

# 良心の碑 いしづみ

## 聖書の言葉

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」(ルカによる福音書 2章11節)

イエスの生誕の場面です。

1885年12月18日同志社チャペルの定礎式が行われました。その際、校長新島先生は次のようなことを述べています。「教育は宗教と密接に関係するものであり、同志社の教育もキリスト教と密接な関係を有するものである。今日この定礎式を行い、この建物を神に捧げるのは、行く末大いに喜ぶべきことであると思う。なぜならば、このチャペルはわが同志社の基礎となり精神となるものだからである。」出典『現代語で読む新島襄』(朗読：坂本恵子)

## 12月 月例会

群馬新島研究会との交流企画

日時 12月13日(水) 2時～4時  
発表者 眞下正雄  
テーマ 『安部磯雄』

**ラーネッドに学ぶ** 安部磯雄は1879年9月同志社英学校入学。この年6月同志社は第一回卒業生を出し、卒業生の山崎爲徳、市原盛宏、森田久萬人が教員となった。つまり新島襄、デイビス、ラーネッド、ゴードンの教師陣に卒業生3人が加わり教育体制が充実したとき、安部磯雄は入学したのである。かれはラーネッドの経済学に大きな影響を受けた。かれの卒業演説は「宗教と経済」であった。



**同志社を去る** 安部磯雄は、二度同志社を去っている。一度目は1884年同志社英学校を卒業し神学科に進んだ年である。講義に不満を感じて改善してくれるよう要望したが聞き入れてもらえず村山知至とともに自主退学した。二度目は、1899年同志社綱領改訂問題のあおりを受けて退職した。上京し、日本ユニテリアン教会、社会主義研究会で活動を始めるとともに、東京専門学校(のちの早稲田大学)の講師となった。

同志社は内紛が多く、その度に貴重な人材が流出するのは大変に残念なことである。**早稲田の学風樹立に貢献** 「進取の精神」「在野の精神」を謳う早稲田の学風には、アメリカ留学経験のある安部磯雄(政治経済学・野球などのスポーツ文化)、浮田和民(経済学・政治学)、大西祝(倫理学・心理学)、岸本能武太(宗教社会学)ら、同志社出身者が大きく貢献した。阿部は、社会民主党を結党し政治家としても活躍した。

「吾輩の敬服する新島氏の人格」(『大隈重信演説集』岩波文庫)

「炎々たる愛国の忠誠、教育に対する奪うべからざる主義と、熱心火の如き精神と、死を以て事を成さんと欲する気象とがあった。これ吾輩の最も君に敬服する点である。(中略)我が早稲田大学教授たる浮田(和民)博士、安部磯雄氏なども直接新島君の感化を受けた人々であるそうだが、いずれも人格の立派な学者である。これらは二氏の天分にも因る事であるが、新島君の感化もよほど与って力ある事と思う」

眞下さんの年季の入った、奥の深い安部磯雄研究会に会場は一気に熱気に包まれました。初期同志社教員の熱量が乗り移ったかのようでした。

(文責：支倉清 写真：木原康博)

## 今後の予定

1月・2月は学校法人同志社主催の下記行事がありますので、当研究会独自の活動はお休みです。

1月23日(火) 14時20分より  
新島襄終焉の地 碑前祭(神奈川県大磯町)

2月12日(月) 10時45分より  
新島襄生誕之地 碑前祭(学生会館前)

11時20分より七五三公園で餅つき  
12時50分より学生会館で午餐会  
(午餐会は事前申し込み制です。東京校友会会員には案内が届きます。非会員の方は1月末までに支倉までお申込み下さい)

窓 同志社草創期のメンバーを眺めると、その熱量に圧倒される。その中でとりわけ振幅の大きな人生を送ったのが金森通倫といえるだろう。通倫は〈ツウリン〉と読まれることが多いが、同志社の北垣宗治教授は〈ミチトモ〉説を紹介されている。

金森は新島襄が授けした第1号信徒であり、新島の後継者と目されながらも叶わずに同志社を去り、東京の番町教会に転じるものの、組合教会からも離れ、棄教した。実業

界や政界を渡り歩いた後、妻(小寿)の死をきっかけに信仰を回復。日本救世軍に参加するなどし、晩年に至って同志社との関係を修復した。

人生でいくつもの山場を迎えたが、頂点は信仰を取り戻した時であろう。自伝では「妻の死の瞬間において永遠というものを垣間見た」と回想している。ネットで、HY・ピカリングなる人物が著した「生まれ変わった男たち」という本に出会った。「さまざまな階級のさまざまな年齢層の著名人100人の注目す

べき改心」との副題で、金森が改心した様子も取り上げられている。

ピカリングは、金森が改心に至ったのは9人の子どもの存在が大きかったという。子どもから「なぜお母さんは帰ってこないのか」と問われ、「神が母を必要としているからだ」と答えたが、「僕らだって必要だ」と返されてしまう。この場面、「わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また生きていて、わたしを信じる者はいつまでも死なない」(ヨハネによる

福音書11章17説)が金森の心境を描き、「背信の子らよ、帰れ。私があなたがたの背信をいやそう」(エレミヤ書3章22節)の一節も挿入されている。

本は金森が存命中だった1920～30年ごろに書かれたようだ。著者がどのようにこうした情報を入手したのか、金森自身がこの描写にどう反応したかは定かではない。ただ、当時から海に向こうでも金森の存在が広く知られていたことは大変興味深い。(福岡 宰)